

「ただの人として」

立場上、色々な手紙やお便りを書くことが多いのですが、この年始の時期に厄介なことがありまして。どうしても無意識に 2025 年と書いてしまうんですね。これは、もう反射的なことで指と手が勝手に、2025 って書きちゃうんですよ。この説教原稿にも、右上に日付を入れていますが、2025 と書いて、「いや、違う違う」と書き直したところです。最近では、キリスト教保育連盟北陸部会で発出した部会全加盟園向けのお便りに「締め切りは 2025 年 1 月 31 日です」と書いてしまい、気遣い上手と言うか、非常に丁寧な方々から「これは 2026 年の間違いですよね」というお問い合わせを頂きまして、「ごめんなさい」って感じです。・・・でも、ほら、そこはまあ、言わなくてもね・・・。1 年前の締切なんて、あり得ないわけだし。そっと読み替えて各々ご理解頂いても良いのになぁ。とか言い訳をしてしまうのも、私の悪いところですね。以後、気を付けたいと思います。

さて、そんな凡ミスも犯す私にとって、個人的には、今日の聖書箇所が含まれているコヘレトの言葉に書かれている、徹底した人の至らなさ、浅はかさ、空しさを指摘する表現には、かなり慰められるところがあります。「間違えたって仕方ないじゃない、人間なもの」みたいな。もちろん、コヘレトの言葉の通りに人生を受け止め、コヘレトの言葉のように生きようとする、かなり無理が生じるのは確かです。多分、みんな生きるのが嫌になってしまいます。ただ、より良く生きる上での少々苦味の効いたスパイスとして、コヘレトの言葉を読んでみるのは、かなり有意義なんじゃないかと思います。例えば、どんなに称賛される学者でも、慈善家でも、政治家でも「虐げられれば狂い、賄賂をもらえば理性を失う」存在なのだと弁えていれば、世の中の不祥事に対して、いたずらに心騒がせることもないのかなと思います。実際には、賄賂をもらわなくたって、ただその地

位にあるだけで、その権力を持つだけで狂わされることもある、と言うことは、ここ最近、切に感じるところでもあります。

コヘレトの言葉を書いた人物について、伝統的には知識に恵まれたソロモン王であると言われていますが、厳密な聖書学の見地から言えば、よく分からない、と答えるのが誠実な判断と言えます。

「コヘレト」とは、「教えを説く者」という意味の言葉で、人名ではなく称号や肩書に近いものです。ただ、確かなのは、このコヘレトと称する人物は、とても賢く、裕福で、あと時間を持て余していた、ということです。賢い人が、お金も地位もあって、かつ時間にも余裕があったら、何をやるだろうか、という問いの一つの答えが、このコヘレトの言葉ですね。コヘレトさんは、その人生を費やした壮大な実験を行いました。たくさんの知識を学び、知恵を得て、幸福とは何かということ、莫大な費用を掛けて探し求めていきます。その辺りのことは、2章に詳しく書かれていますが、まあ、絵に描いたような豪勢な暮らしを整えていったわけですが、それは、欲望のためと言うより、哲学的な探求のために実験していたんですね。そして、得た結論と言うのが、「しかし、わたしは顧みた、この手の業を、苦勞の結果のひとつひとつを。見よ、どれも空しく、風を追うようなことであつた。太陽の下に、益となるものは何もない」ということでした。と言っても、まあ、そんな豪勢な生活に手が届くはずもない私たちが、その結果だけ聞かされても、素直にはアーメンとは言えないかな、とは思います。あれですね、昔の学習塾のテレビCMにあった「学歴なんて関係ない、東大出てから言ってみたいぜ」みたいな。「贅沢したって空しい」という、そういう達観した言葉っていうのは、是非自ら体験、体感した上で納得したいなあ、という正直な気持ちもあったりします。

しかし、そんな欲望まみれなことを思いつつ、でも、一つの真理として「すべては空しい」という御言葉を教えられている私たちは、ちょっとだけ幸せだと思います。もし仮に、欲望に駆られて

突っ走ることがあったとしても、ふとした瞬間に、コヘレトの言葉を思い出せることができるのだから。テレビでも、インターネットでも、煌びやかで華美な理想像が映し出される世の中にあって、私たちは知恵に満ちた言葉を、いつも御守りとして心に置いておくことができる。これも信仰者の特権であり、有り難いことです。

「まだ経験していないから実感は薄いけど、でも、そういう考え方もアリかもね」という程度の心積もりで、今日の聖書箇所も見ていきたいと思います。7節の賢者の教えは、先ほど触れた通り、どれだけ賢く立派でも理性を狂わされることはあり得るということ。8節は、志に漲る「事の始め」よりも、神様の御業が添えられ、結果と向き合う「事の終わり」の方が重要であるということ。つまり、「これから凄いことをするぞ」と虚勢を張って偉そうに構えるよりも、「なるようになるさ」と気持ちに余裕を保つ方が良いのだと。9節は、解説不要ですね。ただ個人的に思うのは、「イライラ」はくしゃみや咳と一緒にの生理現象なので出るのは已む無し。人に向けて出さなきゃ良いということ。一方で、「怒り」は出来るだけ、その感情を分解して無害に処理した方が良いのかな、と。別に怒りの感情が無くとも、正義は選べますし、そのための正しい手順を考えることもできます。10節については、不可逆的な、もとは戻らない歴史を嘆いても仕方がないという教えであると同時に、もしも本当に昔の方が良かったと思うのなら、昔のようにするためにはどうすればいいか、という問いを立てるべきだ、ということですね。「なぜ良かったか」ではなく「どうやって良くするか」と考えようじゃないか、という。11～12節は、知恵の尊さを語り、命を与え、守るものとして知恵を讃美しています。これも重要な教えですね。私達信仰者は、妄信的に不確かなものを信じているのではなく、御言葉に聴き、御言葉を学び、それを日々の生活と繋げて、今日と言う日を少しでも幸せに、有意義となるように知恵を尽くしています。捧げる賛美と祈りの宛先をしっかりと見据えて。献金がどのように扱われ神様の御用ために用いられるのか理解して。愛するとは何か、

恵みとは何か、赦しとは、命とは何かと考え、それらの知恵を生活に落とし込んで、自分と隣人の幸せのために尽くしている……。ここまでは人が頑張って達成するところで、ここからは神様に委ねて祈るところだと弁えて生きています。そういう線引きをちゃんとしながら生活している人って、多分あまりいないですよ。私たちは、理性で捉えて行動すべき領域と、信仰で捉えて委ねるべき領域を知って生きる「知恵ある人」とであると、個人的には考えています。そこは、やっぱり胸を張っていたいですね。

しかし、その上で、13～14 節の御言葉です。いくら「知恵ある人」でも、いや、本当の意味で「知恵ある人」だからこそ、自らの限界を弁え、人の世の限界を痛感し、神様の御前における不完全さを心に刻んでいたい。「私は、こんなにも深く知っている」と胸を張りつつ「でも、神様には到底敵いません、偉そうにしてごめんなさい」と遜る信仰は大事ですね。自慢げなんだか、自信無さげなのか、はっきりしない態度かも知れませんが、でも、その気持ちの上へ下への変化を意識する生活が、これまた大事なんだろうな、と思います。なんと言いますか、心臓の鼓動を刻む心電図の波形みたいに、ある程度、上下に振れて生きる方が健全なんじゃないでしょうか。「順境には楽しめ」と書いてありますので、調子の良い時には、ちょっとくらい調子に乗っても良いのでしょう。ただ、逆境の時には、自分の無知をしっかりと受け止めて、この広い世界と、自らの人生を導かれる神様に想いを馳せるといふ。順境と逆境の、どちらをも用意された神様の御心に信頼しつつ、どんな状況でも頑張ることと委ねることを忘れずに生きていく。コヘレトさんが見つけた、この一つの真理を、私たちも「実感はない」かも知れないけど、御言葉として有り難く受け取って、今日から始まる 1 週間の道しるべとして掲げて参りましょう。最後にお祈りを致します。

神様。

今日も、あなたの御心のままに、私たちをこの礼拝堂へと招いてくださり、感謝致します。知恵者コヘレトが見出したように、あなたの導かれる歴史と人生は、私たちにとって深遠なる謎に満ちており、とても極めつくすことはできません。どれだけ知恵を多くしても全く足りることはなく、かと言って、知恵を手放して生きるには困難を極める世界です。あなたに与えられた理性を充分に働かせて、この世の理を学びつつ、一方で、委ねる他ない出来事に対しては祈る言葉を私たちにお与えください。ただの人として、時に調子良く楽しみ、時に不調で落ち込むことのある、私たちの儂くも掛け替えのない日々の歩みを、どうかしっかりと支え導いてください。このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。